

DIGとは何か

DIG（ティグ）は、参加者が地図を使って防災対策を検討する訓練です。

DIGはDisaster（災害）、Imagination（想像力）、Game（ゲーム）の頭文字を取って命名されました。また、DIGという単語には「掘る」という意味があり、そこから転じて「探求する」、「理解する」という意味も持っています。DIGには「防災意識を掘り起こす」、「まちを探求する」、「災害を理解する」といった意味も込められています。

DIGでは参加者が自分たちの住む地域の地図を囲み、地図に書き込みを加えながら、みんなでワイワイと議論していきます。そのなかで、自分の住むまちに起こる可能性がある災害を具体的にイメージし、災害が起きたときの対応を考えることができます。

ここで紹介する進め方は一例に過ぎません。参加者の立場や関心によってDIGにはいろいろな進め方があります。

1 住民自らが地図を使って地域の防災対策を検討します

DIGでは、まず自分の住んでいる地域を見つめ直すことから始めます。それは、自分たちで地域の防災マップを作り上げることです。

<災害を知る>

・「どこで、どのくらいの規模の被害が予想されているのか？」

<まちを知る>

・「危険な場所や注意しなければならない施設はどこにあるのか？」

・「何かあった時に役に立つ施設はどこにあるのか？」

<人を知る>

・「いざという時に頼りになる人はどこにいるのか？」

・「近所に手助けが必要な人はいないか？」

これらの情報を地図に落とし込むことで、自分たちの住むまちを再確認します。まちとしての、社会としての防災力を確認することにもつながります。

手作りのハザードマップや要配慮者マップなど、みんなで検討しながら作った防災マップは、いざという時にとても役立ちます。

2 災害発生時の被害を少しでも少なくするためには

自分たちの住むまちを再認識したところに災害が発生します。ここで重要なことは、地図上に広がる災害をイメージすることです。そして、被害を少しでも少なくするためにはどうしたらよいか、今後このまちをどう変えていけばよいかを参加者全員で考えます。このまちとどう関わっていけばよいか、普段の生活のなかでどのような備えをすればよいかなどを話し合みましょう。

自分たちのまちの防災対策をみんなで考えるDIGは、災害に強いまちを作るために大変役立つ手法です。